



こひつじキャンプ終了！ ご支援、ありがとうございました。



2012年1月、「東京 YMCA 山中湖センター」を会場として始まった「こひつじキャンプ」は、国内22回、台湾6回の計28回を開催し、足かけ5年にわたるプログラムを終了しました。このキャンプに参加した福島県在住の親子は総計789名で、その他台湾側スタッフ（台湾基督長老教会）と日本側スタッフ（東京 YMCA・救援対策本部）を加えると、1,000名を優に超えます。

■こひつじキャンプ実績

・期間：2012年1月～2016年10月 実施回数 28回・平均参加人数 29名 ・延べ参加者数 789名

【キャンプ場所】

・国内：東京 YMCA 山中湖センター・YMCA 阿南国際海洋センター・東京 YMCA 妙高高原ロッジ
・台湾：嘉義（嘉義中会）、宜蘭（七星中会）、台南（台南中会）、台東（東部中会）、新竹（新竹中会）、彰化（彰化中会）

※キャンプ地をご提供くださった皆さまに、心から感謝申し上げます。

保護者の方からの声 梶原美穂さん

こひつじキャンプに参加させていただき、ありがとうございました。前回は落選しましたが、最終回の今回に運よく当選できてラッキーでした。非常にたくさんの応募があったことをお聞きして、感慨深いものがありました。雨で外遊びやキャンプファイヤーができなかったことは残念でしたが、釣りができて良かったです。父親と息子は釣りが好きなのですが、近くの場所だとやはり放射能の不安があるため、遠くにでかけて釣りをしています。今回ニジマスだけではなく、“30年お店をやっていて、初めて”という天然のイワナを釣ることができて、息子も大変喜んでおりました。貴重な経験ができて、感謝しています。

先日、自宅周辺の放射線量を NPO の方にホットスポットファインダーで測定していただきました。通学路や公園などにも比較的高い場所があり、厳しい現実を目の当たりにしました。私は生まれてからずっと福島で、大好きな地元だったのに、汚染されてしまったことがとても悲しく辛いです。あれから5年がたち、どんどん風化してきています。周りに放射能を気にする方もあまりいなく、口に出せない雰囲気です。これから年月が経つにつれて、気をつけている人と気にしない人、どんどん差が出てきて、ますます孤立してしまう気がしています。保養に出かけることで、同じような気持ちの方と出会い、話をすることができましたが、保養もどんどんなくなってきているので、そういう機会ももてなくなるんだなあと思います。

先日、甲状腺検査で、息子にのう胞が見つかりました。私自身ものう胞や結節ではないが何かあると言われ、甲状腺専門の先生に診ていただきました。結果、心配するようなものではないだろうということでしたが、100%不安が消えた訳ではありません。甲状腺専門の検査に行くときはとても恐く、将来このような気持ちを我が子にも抱かせるかもしれないと思うとがく然とします。自分が子育てをする時にこんな事態になるとは、思っていませんでした。

置かれている事態の深刻さと、周りの方々とのギャップに時々動けなくなる時があります。これから自分達はどうすれば良いのかなあと途方にくれることもあります。しかし立ちすくむのではなく、前を向いていかないと。自分を奮い立たせなければいけません。

たくさんの笑顔と元気を、今回のこひつじキャンプでいただくことができました。放射能を気にせずに生活できるのはやはりいいなあと思います。

東京 YMCA のみなさん、日本キリスト教団の皆さん、支援して下さった方々、たくさん準備していただいてありがとうございました。深く感謝しております。

もしまたお会いできる機会がありましたら、とても嬉しいです。



日本基督教団

東日本大震災救援対策本部ニュース

Vol. 21

2016年12月19日発行

169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18 T/F 03-3205-6088 救援対策本部長 石橋秀雄

国際青年会議 プレ会議報告

脱原発の旗、 ひるがえす時を共に



あの東日本大震災から5年8ヶ月が過ぎたが、今なお日本はその余震に見舞われている。つい11月22日にも大きな余震を受けて津波警報が出され、大勢が避難した。この地震によって、東京電力福島第二原子力発電所3号機の使用済み燃料プールに設置された冷却ポンプが一時的に止まった。私たちは未だ事故の最中にある。それでもなお原発の再稼働は秒読み状態であり、政府は国外へ原発を売り込んでさえている。

2014年に行われた日本基督教団東日本大震災国際会議（国際会議）以降、日本基督教団はその原発再稼働の動きにどれほど抗って来られただろうか。国際青年会議 in 京都（国際青年会議）の準備として2016年9月に行われたプレ会議では、13教区から青年の派遣を受けて、その問いが鋭く問われた。福島県外へ自主避難した方からの報告では、県外へ避難した人びとへの支援が広がらないのは「福島の問題だ」という意識があるからではないかと指摘を受けた。参加者からは「原発事故の当事者という意識がなければ国際会議には向かえない」との意見が出た。それはつまり、教団が東北の教会や被災者に対して何をしてきたかではなく、被災した教団として何をしてきたかが、問われているということだ。

国際青年会議は、先の国際会議で採択された宣言文の中の「決意と呼びかけ」に挙げられた課題、特にその6、7、8項に謳われた、核のない世界を実現するためのネットワークづくり、再生可能エネルギー利用の促進、若い世代の教育と訓練を主要なテーマとして、決意を実行に移すべく開催される。国際会議そのものが東日本大震災をきっかけとして起こった東京電力福島第一原子力発電所事故を「人災」とであると強く意識したものであり、宣言文もその事故への反省、祈りと決意表明から成り立っているため、国際青年会議も明確にあの事故の文脈の中に置かれている。だからこそ、「当事者に対する支援」ではなく「当事者として何ができるか」を検討するものでなければならない。

核開発は、核兵器開発と表裏一体であると同時に、経済社会に深く根を張っている。核燃料の採掘過程では被曝労働者と放射性廃棄物が大量に生み出され続けている。核エネルギーを問うということは、政治、経済のあり方を問い、戦争と向き合うことに他ならない。問題を指摘することは難しくない。重要なのは、指摘された問題乗り越え、持続可能社会というヴィジョンをどれだけ現実的に描けるかであり、それこそが国際青年会議成功の鍵となるだろう。

この点について現在、国際青年会議の運営委員が目しているのは、講師である田中優さんの実践されるオフグリッド（電力自給）生活の実際と、個人レベルの線量計がグローバルにネットワーク化されることで、電力会社や政治のフィルタのかからない放射能汚染についての生のデータが得られる Safecast という仕組みだ。この2つの共通点は、個人で行えることと、すでに運用されていることの2点である。言い換えると、今から、あなたにもできる、ということだ。脱原発という旗を掲げるとき、それを電力会社や政府に向かって振りかざすと、どうしてもその権力や経済構造の前で閉塞感に包まれてしまう。しかし、個々人が「私は脱原発した」という証としてその旗を立てることができ、さらに世界中でその旗がひるがえったとすれば、原子力政策は根本的に立ちいかなくなる。このような未来を、実現したい。

「はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。」（マタイ 25:45）と主は言われた。悪を行うことなく、善を為さないことが罪なのだ。残された時間は3ヶ月と短い、世界から集う若者が、自分たちが何をすべきかを存分に話し合えるよう準備していきたい。

国際青年会議運営委員 岡本拓也

台湾訪問記

報告：佐藤真史（東北教区被災者支援センター・エマオ）

「私たちの同胞が苦しんでいる」。

ボンヤリとしか分かっていなかった遠方からの祈り・支援が、熱のこもった生の言葉として響いてきた瞬間でした。東日本大震災が起こった際にご高齢の台湾人女性が教会でおっしゃっていた言葉として、うすきみどり牧師（教団派遣宣教師、台北・国際日語教会）が私たちに紹介した言葉です。住む国も言葉も異なる私たちにとって、どうしても分かりきれなかった「遠方からの被災地への祈り」に出会い気付かされる旅でした。

11月24日から30日にかけて、台湾基督長老教会（以下、PCT）が東北教区被災者支援センター・エマオのスタッフ14名をお招きくださいました。石橋秀雄教団議長、飯島信教団担当幹事、片岡舘也牧師（東北教区世界宣教協力委員長）、4名の通訳スタッフ、そして林偉聯牧師（PCT「教会と社会」委員会担当幹事）とイワン・ホシさん（同委員会担当職員）が同行してくださいました。

PCTは2012年夏から2016年夏までの間に、計268名のボランティアワーカーたちを派遣してください、そのワーカーたちと台湾各地で再会し、エマオでのワークを共に振り返ることができ、スタッフ一同、心から感謝しています。

24日（木）



PCT本部で歓迎会が行われ、林芳仲牧師（PCT総幹事）が出席。石橋教団議長より、小西東北教区議長と連名の感謝状および記念品を贈呈。林総幹事より、「地球温暖化や、日本や台湾各地で起こる災害に対して、国を越えて教会の兄弟姉妹として、日本基督教団と協力して取り組んでいきたい」というメッセージをいただく。

25日（金）

19時より研修プログラム（35名出席）を開催。開会礼拝では、石橋議長が、「被災地に立たされた時に、『われらの助けは天地を造られた主のみ名にある』（詩124:8）という御言葉が響いた。エマオに出会って変えられた青年たち、悲惨を知って自分自身を問い直した青年たちがいたことの恵みに感謝」と説教。

エマオとPCTより2名ずつ発題。

高橋千沙子スタッフからは、「あるPCTワーカーは『コミュニケーションを大切にする『スローワーク』は、実はハードワーク』だと言っていた。それだけ丁寧なワークをしてくれた」と振り返りがあった。

翁姿淳さん（ワーカーネーム：じゅんこ）からは、「2011年（当時13歳）の頃から毎年のように申し込んだけれども叶わず、ずっと祈っていた。2016年の最後のチャンスに受かったことを知りとても喜んだ。たった2週間でも



高橋千沙子さん

東門教会 PCT ワーカーと



歓迎会にて



翁姿淳さん

自分の中に大きな変化を感じた。『悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる』（マタ5:4）を胸に刻みたい」という発題があり、彼女の熱意に触れることが出来た。

26日（土）

午前の研修会では、林幹事および私が発題し、石橋議長および鄭國忠牧師（PCT「教会と社会」委員長）からのコメントをいただく。

林幹事は次のように発題。「台湾では毎年のように災害が発生する。それに対して、PCTでは『教会と社会』委員会が常に対応している。しかし、国際的な支援活動の場合、①台湾と国交がないと献金を送れない②そもそも先方との信頼関係が不可欠、という二つの壁があった。『3・11』の際、本当に大きな献金が集まり、日本基督教団の呼びかけに応えることが出来た。エマオへのボランティア派遣が始まった2012年夏には80名定員のところ500名の申し込みがあった。選ぶ際に必ずPCT以外のクリスチャンでない人も、各チームに一人ずつ入れた。私たちは何よりも『スローワーク』の大切さを学んだ」。

私は次のように発題。「日本では『3・11』がどんどん風化されていく中で、PCTからは毎夏必ず送って下さる姿にいつも励まされた。特にスタッフは孤立感を覚えがちだが、遠く離れた台湾から来て下さるワーカーたちの存在は大きかった。PCTから派遣した青年たちのネットワークを、ぜひこれからも活用していったほしい。特に『次の災害』にすぐに動いてくれるネットワークとして活きると思う」。



大工チーム！



27日（日）

5つのPCT教会（台北・東門教会、桃園・迦南教会、台中・豊原教会、嘉義・橋頭教会、高雄・苓雅教会）に分かれて礼拝に参加し感謝を伝えた。

東門教会では、ご高齢の原住民*（ユエンツーミン）女性が私に日本語で懐かしそうに話しかけてくださる。楽しい会話の中でふと出た「大東亜戦争（ママ）の頃はつくった米もみんな日本に持っていかれた。日本は厳しかった」という言葉に、自分の無知を痛感した。

礼拝後それぞれ高雄まで移動し、夜は高雄・苓雅教会



林曉瑩さん (Debby)



高雄・苓雅教会での集い

にて集いの会（50名出席）を持った。

エマオから2名、PCTワーカーより1名、そして遠東大学ワーカーより3名の発題。

林曉瑩さん（ワーカーネーム：Debby）は次のように発題。「2014年にエマオに行けることがわかった時、インターンを断った。自分のキャリアを考えて周囲からは反対されたが、断って正解だった。いま働いているが、日々のストレスの中でエマオの思い出が明日への一歩になっている」。

内手翔太スタッフは次のように発題。「あるワーク先の方が、ビニールハウスの中で台湾の人たちが固まって話している時に疎外感を感じていたことがあった。それが果たして丁寧なワークだったのだろうか。その点はぜひ振り返って考えてほしい。ただし、これはスタッフが頑張れば防げることだった。その一方で、荒浜で被災したSさんが移転先の神屋敷でのコミュニティづくりのために、『台湾お茶っこ』を企画したことがあった。天気も悪かったので果たして何人集まるかまったく分からない中で、『台湾の人たちがわざわざ来てくれるから』と20人も集まって来て下さった。これはスタッフに出来ないことだった。いいことも、そして悪いことも反省しつつ繋げていくことがスローワークだと思う。本当にありがとう」。

最後に林幹事が、「エマオで出会った『スローワーク』を台湾で繋げていくために、『エマオ台湾』をぜひ創っていきましょう」と呼びかけた。

*台湾の先住民は自らを「原住民族（ユエンツーミン）」と称していることを尊重し、この表記を使っています。

高雄・苓雅教会にて



28日（月）

台東駅では東美中会から5名の牧師・信徒の方たちがワゴン車4台と共に迎えに。

PCT原住民（ユエンツーミン）宣教委員会が運営している「台東県原住民族全人発展協会」を訪問。

2012年、2013年と来てくれた大工チームの方たちと共に昼食会。総勢34名。ワークに入った方たちからのビデオメッセージをお見せすると大変喜ばれ、中には涙する方もいた。被災者の方たちとの出会いを今もとても大切にされていた。

7月に台風被害のあった豊源地区へ行き、PCTが家屋の修復をしているお宅を訪問。そこに住む女性は檳榔を包む葉を集める仕事をしているが日雇いでとても貧しい。しかも台風被害の影響でますます仕事が少なくなった。持ち家ではないので、PCTは大家と直接話し合い、修理する条件として、少なくとも3ヶ月間は彼女を無料で住まわせることを約束してもらっている。被災地で特に小さくされている人たちと共に歩むPCTの姿に出会った。

大工チームの皆さん



台風被災住宅にて



29日（火）

花蓮を訪問し、2012年にワークに参加した、謝恩河牧師（光福教会）たちと昼食を共に。花蓮駅では中会議長がわざわざ見送りに。

台北駅到着後は自由行動。4名は国際日語教会が台北YMCAを会場に行っている「聖書と日本語教室」へ参加。とても熱心に日本語で聖書を学ぶ姿に励まされた。その後、うすきみどり牧師と共に会食。PCTが直面する台湾語継承の課題、教団との違い、伝道の喜びなどを分かち合った。



花蓮の皆さんと

30日（水）

朝、台北を出発し桃園空港へ。空港までの車中で、林幹事へ津波被災したKさんからの献金をお渡しした。仙台空港到着後、全日程が守られたことを感謝しつつ祈りを献げた。